

1	猿樂興行の共催と順序	55
2	船岡山合戦後の猿樂興行の政治的背景	57
四	義晴期の猿樂興行	59
1	細川高国の猿樂興行	59
2	猿樂興行の主催頻度と幕府政治	62
第二節	大名邸御成と在京大名	66
一	大名邸御成と御成記	66
1	大名邸御成の儀式次第	66
2	御成記の史料性格	68
	(1) 「永正十五年畠山順光亭御成記」	68
	(2) 「大永三年伊勢貞忠亭御成記」	69
	(3) 「大永四年細川尹賢亭御成記」	70
	(4) 「天文七年細川晴元亭御成記」	74
	(5) 「天文八年六角定頼宿所御成記」	75
3	御成記の作成目的	76
4	大名邸御成の構成要素	79
5	大名邸御成の儀礼的性格	86
二	政治過程における大名邸御成	88
1	足利義植の上洛と大名邸御成	88

2	船岡山合戦後の大名邸御成	90
3	細川高国と浦上村宗の連携	93
第三節	足利将軍家元服儀礼と在京大名	96
一	足利将軍家元服儀礼の構造的特質	96
1	元服儀礼の式次第	96
2	元服儀礼の構造	98
3	元服儀礼の特質	100
二	足利義澄の元服	102
1	足利義澄と細川政元の相互関係	102
2	元服儀礼の延引	103
三	足利義晴の元服	107
1	足利義晴と細川高国の相互関係	107
2	元服儀礼の指揮	108
四	足利義輝の元服	112
1	足利義輝と六角定頼の相互関係	112
2	加冠選出の政治的背景	114
小括		117

第二章 細川京兆家奉行人奉書による幕政の補完と代行……………132

はじめに……………132

第一節 室町幕府奉行人奉書と細川京兆家奉行人奉書……………135

一 細川京兆家奉行人奉書による遵行……………135

二 細川京兆家奉行人奉書と山城国守護……………145

第二節 細川京兆家奉行人奉書の社会的効力……………147

一 細川京兆家奉行人奉書発給の契機……………147

二 細川京兆家奉行人奉書の機能……………151

(1) 様式……………179

(2) 発給範囲……………183

(3) 充所……………184

(4) 内容……………188

第三節 細川京兆家奉行人奉書発給の背景……………191

一 将軍権力の政務処理……………192

二 細川京兆家の課題解決力……………194

第四節 細川京兆家の政治機構……………201

一 細川京兆家奉行人の活動……………201

二 細川京兆家の訴訟審理・裁許……………205

小括	209
第三章 義植後期・義晴前期の幕府政治と細川高国	219
はじめに	219
第一節 義植後期の幕府政治	222
一 明応の政変以前の幕政運営	222
二 義植後期の幕政運営	225
三 幕政運営をめぐる将軍と在京大名の対立	229
第二節 義晴前期の幕府政治——「御作事方日記」を中心に——	234
一 将軍御所移転計画の遂行	234
1 将軍御所移転の提案	234
2 将軍御所移転計画	236
(1) 国役	239
(2) 棟別銭	242
(3) 候補地	244
(4) 惣奉行	248
(5) 普請始	249
二 義晴前期の幕政運営	250
1 作事奉行の役割	250

2	政治協議の場	252
3	幕府政治と在国大名	253
4	將軍権力と細川京兆家の共同執政	256
5	幕府政治の主導者	258
	小括	265

終章

終章 273

一 在京大名細川京兆家の政治的位置

一 在京大名細川京兆家の政治的位置 273

1 細川高国家権力の特徴

1 細川高国家権力の特徴 273

2 細川高国家権力の確立

2 細川高国家権力の確立 276

3 細川高国家権力の後退

3 細川高国家権力の後退 281

二 「在京大名」について

二 「在京大名」について 282

参考史料一覧 288

参考文献一覧 295

あとがき 301

索引（人名・事項）

■図表一覧■

図 1	細川京兆家略系図	29
図 2	足利將軍家略系図	29
表 1-1	武家主催の猿樂興行	36
表 1-2	猿樂の興行場所	46
表 1-3	將軍御所の猿樂興行主催回数	64
表 1-4	將軍御所以外の猿樂興行主催回数	65
表 1-5	御成記の内容	77
表 1-6	戦国期の大名邸御成	80
表 1-7	大名邸御成の場所	83
表 1-8	大名邸御成の主催回数	84
表 1-9	足利將軍家元服儀礼の構成要素	99
表 2-1	細川政元家奉行人奉書	151
表 2-2	細川高国家奉行人奉書	158
表 2-3	細川晴元家奉行人奉書	164
表 2-4	細川京兆家奉行人奉書の様式	180
表 2-5	細川京兆家奉行人奉書の発給対象地域	184
表 2-6	細川京兆家奉行人奉書の受益者	185
表 2-7	細川京兆家奉行人奉書の内容	188
表 2-8	細川政元家奉行人奉書の発給数の推移	195
表 2-9	細川高国家奉行人奉書の発給数の推移	195
表 2-10	細川晴元家奉行人奉書の発給数の推移	195
表 2-11	細川京兆家奉行人奉書の発給者	195
表 3-1	將軍御所移転計画の推移	236

序 章

一 幕府政治史研究の軌跡と本研究の視角

本研究は、在京大名細川京兆家の政治的位置を考察することにより、戦国期における幕府政治の特質を解明するものである。

戦国期の幕府政治は、將軍とその側近を中心とする將軍権力、幕政に参加した大名の両者が共同で運営していた。このような幕府政治の構造を反映し、幕府政治史研究も將軍権力研究と大名研究を中心に進められてきた。そこで、幕府政治を論じる前提として幕府政治史研究を概観し、その課題を整理することにした。

戦国期幕府政治史研究の出発点に位置づけられるのが、今谷明氏の一連の研究である。従来、戦国期幕府を扱った研究が応仁・文明の乱後から明応の政変までの時期にほぼ限定されていたのに対し、今谷氏の研究は永禄一一年（一五六八）の織田信長上洛までを対象に幅広い観点から論じ、戦国期幕府の性格規定を行ったという点で画期的なものであった。⁽¹⁾ 現在においても、戦国期畿内を扱った通史では必ずと言ってよいほど今谷氏の著書が参照されており、その研究史上に与えた影響は非常に大きい。

今谷氏は戦国期の室町幕府を畿内政権と規定し、幕府解体過程の実態解明を行ったが、その中核となったのが室町幕府奉行人奉書と細川京兆家奉行人奉書を用いた研究である。⁽²⁾ 今谷氏は室町幕府奉行人奉書と細川京兆家奉

行人奉書を網羅的に収集した上で、文書様式の違いなどから、従来、混同されていた両者が別個のものであることを明らかにした。また、室町幕府奉行人奉書を遵行する細川京兆家奉行人奉書を「管領代奉書」（または「管領代添状」とし、管領代奉書は管領奉書に代替する機能を実質上持ち、侍所所司代が有していた洛中刑事警察に關する幕府奉行人奉書の遵行権を吸収するなど、管領代奉書が幕府奉行人奉書の実効力を補完するとした。

今谷氏は管領代奉書による幕府奉行人奉書の補完を細川京兆家（細川惣領家）による幕府機構の吸収と捉えたが、この考えをさらに進めたのが「京兆専制」という概念であった。³⁾「京兆専制」とは、細川京兆家の家督に幕府の実権が移行する実態を指す概念である。今谷氏は、文明一八年（一四八六）八月の多賀高忠（侍所所司代）死去後、侍所頭人・同所司代が設置されなかったこと、高忠死後、土一揆の鎮圧や盜賊・謀反人の追捕など洛中の検断権を細川京兆家が行使したことを根拠とし、細川京兆家が侍所の検断権を吸収したとする。また、細川京兆家による大和・河内への侵攻や被官關係を背景とした山城国支配の進展を守護権の拡大と捉えた。そして、永正五年（一五〇八）の幕府奉行人の大幅な交代を同年に起きた細川京兆家の家督交代と密接な関連性があるものと推定し、細川高国による有力奉行人の罷免が行われたとした。幕府奉行人の交代と相論への介入については、細川京兆家による幕府の訴訟指揮・審理主導の根拠とした。今谷氏はこうした細川京兆家の動向について、幕府権力の吸収と捉えたのである。さらに、「京兆専制」の背景として、「国人不登用策」（細川京兆家の分国であった摂津・丹波出身の国人を守護代・郡代などの役職や内衆に任用しないという政策）による細川京兆家内衆と国人の対立、山城国一揆による南三郡の守護権掌握を指摘し、これらの課題へ対処するために強力な専制権力を必要としたことが「京兆専制」の政治的契機となったとした。

そして、一連の研究の結論として「すなわち、戦国期の畿内政権は、軍事的には細川氏の畿内分国を主たる基盤に、支配組織は前代の幕府諸機関を縮小しながら継承し、官制上は將軍を最高位に擁立しながら実質的には細

川氏家督（京兆家）が幕府諸機構を総覧・指揮して統治するという政権であつた⁽⁴⁾と、戦国期の幕府を細川京兆家が実権を持つ畿内政権と規定した。今谷氏の研究によって、明応の政変から織田信長上洛までの時期は細川・三好政権の時代として整理され、実証的な研究に基づく幕府政治史の枠組みが作られたのである。

今谷氏の研究は戦国期幕府の実態解明を目的としたものだが、細川京兆家による幕府機構の補完・掌握という理解の下で進めたため、研究の中核を占めたのは細川京兆家研究であつた。それに対し、將軍権力の実態解明を進めることによつて今谷氏の研究の相対化を図つたのが設楽薰・山田康弘両氏である。設楽薰氏は、足利義尚・義材（義植）・義晴の側近の活動形態と將軍の政務決裁を検討し、義尚期の評定衆、義晴期の内談衆など、將軍がその側近を補佐役ないし代行者として政務決裁を行つていたことを明らかにした⁽⁵⁾。設楽氏は細川政権と幕府は別個に機能しており、將軍は独自の政治機構を保持していたとし、將軍権力と細川京兆家を一体的に捉える今谷氏の論を批判している。

山田康弘氏は戦国期幕府の案件処理（意思決定）方式である御前沙汰と政所沙汰について検討し、具体的手続と案件処理に関わる將軍や内談衆の役割を明らかにした⁽⁶⁾。山田氏は、天文期の御前沙汰は將軍足利義晴・内談衆・奉行衆、政所沙汰は政所頭人伊勢氏・政所代・奉行衆（政所寄人）によつて担われており、細川京兆家家督や内衆が直接的かつ恒常的に関与することは原則としてなかつたことを指摘している。また、明応の政変後の義澄期の幕府内の状況について、將軍義澄の政務を後見する伊勢氏の活動や山城国一揆をめぐる伊勢氏と細川京兆家の対立、義澄の諸政策とその限界などを検討し、將軍や伊勢氏が細川京兆家とは異なる意図を持つて独自の政治動向を示していたことを明らかにした。山田氏はこれらの検討によつて、戦国期においても將軍やその側近、

直臣団など將軍に直属する勢力が幕府内において独自の意思決定を行う権能を保持しており、幕府＝細川京兆家政権という等式は成り立たないとして今谷説を批判している。將軍権力研究の進展により、戦国期においても將

軍は独自の政治機構を持ち、細川京兆家とは別個の権力として一定の自立性を維持していたことが明らかになった。

さらに、山田氏は戦国期における将軍と大名の関係について考察し、大名は、他大名との外交などの対外問題への対処、大名の家中・領国内の対内問題への対処に将軍を利用し、将軍は、室町期以来大名に依存していた軍事・洛中警察・上意の実効性といった存立の重要部分を細川京兆家や六角氏・織田氏によって支えられ、その他の大名に経済的援助や疎開先の提供などにより支えられるという、互いに利用し合う相互補完関係にあったとしている。⁽⁷⁾ 山田氏は将軍権力が細川京兆家に全面的に依存していたのではなく、複数の大名に支えられていたことを指摘することで今谷氏の幕府論の相対化を図り、将軍権力と細川京兆家の関係を相互に依存する相互補完関係として捉え直している。

山田氏は将軍と大名の相互補完関係について、室町期以来続く将軍権力の構造と位置づける。しかし、幕府政治における大名の位置づけとしては不十分である。有力大名の在国恒常化は幕府の権力構造に変化をもたらした。大名は幕府政治に直接参加して自らの意向を政策に反映させる者と、将軍権力と交渉を持つにとどまる者の二つに分かれた。前者と後者では政治的役割が大きく異なっており、両者は明確に区別すべきである。室町期と戦国期では将軍と大名の関係性は変化しており、幕政上における大名の政治的役割は、戦国期特有の問題として改めて論じる必要がある。

一方、大内義興・六角定頼といった細川京兆家以外の大名による幕政関与の実態解明を行うことで幕府政治史の見直しを図る動きが現れた。今岡典和氏は義植後期における細川高国・大内義興の幕政関与について将軍御内書に対する副状発給や幕府裁許への口入を通じて検討し、高国・義興が幕府に強い影響力を有していたことを指摘した。⁽⁸⁾ 奥村徹也氏は義晴後期における六角定頼の政治的位置について検討し、定頼が幕府裁許や外交に強い影

響力を行使していたこと、幕府からの諮問を受ける立場にあったこと、幕府と細川氏の調停役となったことなど、定頼が政治・軍事・外交の面で重要な役割を担っていたことを明らかにした。⁹西島太郎氏は定頼の幕政関与の実態解明を行い、定頼は將軍からの重要案件の諮問に対する意見、相論などへの口入を行い、將軍側近によって構成された内談衆と共に幕政の中核にあったと指摘している。¹⁰小谷利明氏は義植後期に在京活動を行っていた畠山義元と畠山卜山（尚順）も幕府権力の重要な構成要素であったとした。¹¹

近年の大名研究により、細川京兆家だけでなく大内義興や六角定頼も將軍権力に対して影響力を有していたことが明らかにになった。このことは、細川京兆家以外の大名の幕政上における役割を過小評価していた今谷氏の幕府論の問題点を明確にした。しかし、その反面、大内義興・六角定頼の個別研究という性格が強く、細川京兆家も含めた大名全体を幕政上にどのように位置づけるかという議論には至っていない。

他方、細川氏研究は今谷氏の研究を肯定的に捉え、細川京兆家の実態解明を進める形で展開した。森田恭二氏は細川京兆家の守護代を中心とした領国支配体制を「守護代・国人体制」とし、守護代・国人による在地の支配体制が細川・三好政権の基盤となるとした。¹²森田氏の「守護代・国人体制」においては、細川京兆家の内衆であった守護代が有力国人とされるなど、内衆と国人が一体視されている。しかし、細川京兆家直臣である内衆と在地領主である国人では細川京兆家の家中における発言力や在地支配との関わり方は大きく異なっており、両者を一体的に捉えるのは適切ではない。森田氏の研究は今谷氏の「国人不登用策」に依拠した議論であるが、後述するように、論拠となった今谷説が史料との矛盾により成り立たないという問題点を抱えている。

また、横尾國和氏は、細川京兆家の守護代家を中心に安富・葉師寺・内藤・長塩・上原・秋庭の各内衆について、姻戚関係や人名比定、内衆間の抗争や在地支配との関係などの実態解明を行った。¹³横尾氏は細川政元期において有力内衆による評定衆が成立していたことを明らかにし、評定衆の動向が政元期細川京兆家の政策に大きく

影響したと指摘している。

細川氏研究における転機となったのが、末柄豊氏の研究である。⁽¹⁴⁾末柄氏は応仁・文明の乱後の細川氏の性格について、細川氏同族連合体制、細川京兆家による畿内領国化という二つの視点から論じた。細川氏同族連合体制とは、南北朝期から室町初期にかけての細川氏分国と内衆の形成過程を論じた小川信氏が指摘した細川氏の特徴である。⁽¹⁵⁾小川氏は、細川京兆家を中心に庶流家が連合する強固な同族結合の存在を指摘し、それが幕府における細川氏の勢力確立と密接な相関関係にあったとしている。しかし、小川氏は細川氏同族連合体制の内容については論じておらず、この概念の内容規定を行ったのは末柄氏である。末柄氏は応仁・文明の乱前後の細川氏同族連合体制について、一族の集中の契機とその装置の二点から実態解明を行った。その結果、集中の契機は守護職の保全による分国の安定的な保有とし、装置は所領と内衆を通じて統制とした上で、細川氏の同族連合体制の本質は京兆家による内衆を通じて庶流守護家統制であったと指摘した。また、応仁・文明の乱後、守護職の保証条件の変化によって結合の契機が消失し、紐帯となっていた内衆の没落や所領の押領によって装置も有効性を失ったことから、細川氏同族連合体制が解体へと向かい、細川京兆家はその基盤を畿内中心に改めていったとする。

末柄氏は、今谷氏が「京兆専制」の過程とした「専制化」と呼ぶ現象は細川京兆家による畿内支配の展開であり、明応の政変に至るまでの細川氏の政治動向は、幕府内部における専制権力の確立を図った過程ではなく、畿内領国化の過程であったと批判した。また、今谷氏が「専制化」の根拠とした山城国支配について、守護職の保持ではなく畿内の国人・土豪層に対する被官関係を一元化することによって進めていたことや、⁽¹⁶⁾障害となる足利義材や畠山政長を排除する形で進めていたことなどを根拠として、幕府内部における専制権力の確立ではなく、幕府から相対的に独立した一元的な地域支配、すなわち、畿内領国化と捉えた。そして、領国化の対象は京兆家分国であった摂津・丹波だけでなく、山城・大和・河内にまで及んだことから、細川京兆家は畿内全域の領国化

を志向したことを指摘した。

また、今谷氏の「国人不登用策」について、摂津・丹波の国人出身者が応仁・文明の乱以前から内衆として活動していることから実証的に成り立たないことを明らかにした。末柄氏は、今谷氏が細川京兆家内衆と国人の対立と捉えていたものは政元近習となっていた国人と守護代である有力内衆の対立であり、根本的には国人掌握をめぐる京兆家家督と守護代級有力内衆の間の対立であったとした。

末柄氏の研究は、「京兆専制」や「国人不登用策」といった今谷氏の所論の実証面における問題点を批判した上で、戦国期の細川京兆家の政治動向について、幕府権力内部における専制化に代わる視点として畿内領国化を指摘したものである。被官関係を媒介とした山城国支配の展開は幕府の制度的枠組みを逸脱して行われたものであり、末柄氏が指摘したように、幕府制度と別個の細川京兆家独自の政治動向と捉えた方が妥当である。

しかし、一方では有力大名の在国恒常化によって幕府における細川京兆家の発言力が相対的に強まっており、細川京兆家による幕政関与も継続的に行われている。細川京兆家の政治動向を、幕府内における専制化、幕府制度外の権力基盤強化と二者択一的に捉えるのは適切ではない。幕府内における影響力を確保しつつ、分国の拡大を図るといふ新たな政策志向を持ったと見るべきである。

末柄氏の研究以降、細川氏同族連合体制が細川氏研究の新たな論点となり、細川氏同族連合体制をめぐる議論や庶流守護家の研究に関心が移っている。山下知之氏は末柄氏の細川氏同族連合体制に対する所論について、細川京兆家内衆と庶流守護家内衆に同姓の氏族が存在したことなどを根拠とする、細川京兆家による内衆を通じた庶流家統制は史料の根拠が乏しいこと、応仁・文明の乱後に細川氏同族連合体制は崩壊したとするが、乱後も細川氏一族としての行動が史料上に散見され、体制が維持されていたことが窺えることを問題点として指摘している⁽¹⁷⁾。そして、細川京兆家分国讃岐における、細川阿波守護家による讃岐国衙領支配、細川備中守護家分国備中

における、細川京兆家による備中国衙領支配を事例として、細川京兆家と庶流守護家との相互補完的な支配体制・共同支配体制を明らかにし、文明期の京兆家と阿波守護家が協調して行動していることから、乱後も細川氏同族連合体制が維持されたとしている。いずれも的確な指摘であり、山下氏が指摘するように、細川氏同族連合体制は京兆家と庶流家の相互補完的な族的結合であり、応仁・文明の乱後も維持されたと捉えるべきである。⁽¹⁸⁾

また、岡田謙一氏は庶流守護家である細川和泉上守護家・細川和泉下守護家の実態解明を行っている。⁽¹⁹⁾和泉国は上守護家と下守護家の二つの守護家による支配が行われていたが、戦国期になると細川京兆家の分裂抗争と連動して和泉守護家の改変が行われたことを明らかにしている。

そして、近年における細川氏研究のまとまった成果として挙げられるのが、古野貢氏の一連の研究である。⁽²⁰⁾古野氏は、先述した小川信氏による「細川氏同族連合体制」、川岡勉氏の「室町幕府―守護体制」という二つの概念を援用して「京兆家―内衆体制」という独自の概念を提起し、細川氏の分国支配構造の追究を行っている。⁽²¹⁾だが、「京兆家―内衆体制」の主要な論点である京兆家と庶流守護家の一体性、内衆の存在形態について、古野氏が提示した概念と史料から導き出される実態には矛盾が生じており、細川氏の権力構造を理解する上で有効な概念ではないと考えられる。⁽²²⁾

ただし、古野氏の研究において幕政に関する言及が見られる点は注意を要する。古野氏は、戦国期の細川京兆家は幕府を代替したという今谷氏に類似する見解を提示しているが、その論拠は示されていない。現状の幕府政治史研究を踏まえれば首肯できない見解だが、こうした見解が生じるのは、近年の細川氏研究が幕政と細川京兆家の関係を論じておらず、幕府政治史研究との乖離が進んでいるためである。

以上、幕府政治史に関連する将軍権力・大名・細川氏の研究史について見てきたが、今谷氏以降の研究によって、戦国期幕府における将軍権力の自立性、細川京兆家以外の大名による幕政関与が明らかになり、幕府内専制

化の過程とされた細川京兆家の政治動向も幕府制度外の動向との位置づけがなされた。戦国期幕府を細川京兆家による畿内政権とみなす今谷氏の幕府論は、その理論的根拠が崩れており、実態との乖離から疑問視されることになった。現状では今谷氏に代わる戦国期幕府の明確な規定は見られないが、将軍・大名による連立政権という認識が共通見解となっている。

だが、通史においては今谷氏の幕府論の影響がまだまだ根強い。戦国期の代表的な通史である勝俣鎮夫氏の著作では、戦国期幕府を「細川氏家督（京兆家）が幕政を左右する幕府体制」とするなど、今谷氏の幕府論に依拠して幕府政治史が叙述されている。²³ このような傾向は近年になっても続いており、戦国期の国家史を論じた池享氏は戦国期幕府を「政治の実権は京兆家や三好氏の手に移り、将軍の地位もその動向によって左右されるようになった」とし、「畿内政権という地方権力にすぎない」とするが、細川京兆家が実権を持つ畿内政権という見解は今谷氏の幕府論の踏襲に他ならない。²⁴

このように、幕府政治史研究の進展によって実証面における課題が明らかになったにもかかわらず、今谷氏の幕府論は通史に対して大きな影響力を持っている。では、現状の幕府政治史研究はどこに問題があるのであろうか。

まず、第一の問題点は、将軍と大名を切り離して幕府政治を論じていることである。今谷氏の幕府論は実証面で矛盾を抱えつつも、細川氏が主導する畿内政権という一貫した論理で説明することによって包括的な幕府像を提示していた。だが、その後の幕府政治史は将軍権力や大名の個別研究に分化した上、特定の将軍や大名の研究に特化し、各時期の政治形態の差異を比較する視点が乏しかった。将軍・大名を個別に取り上げる研究手法は個々の権力構造や政治動向の整理に適しているが、それだけでは幕政の部分的解明にしかならず、全体像構築には結びつかない。そのため、将軍・大名の関係は相互補充関係と規定されるにとどまり、両者の力関係の変化や権限の

分掌への理解は深まらなかった。その結果、戦国期幕府に対する実態解明が進展したにもかかわらず、全体像については將軍・大名の連立政権という曖昧な共通認識しか生まれなかった。現状の幕府政治史研究は今谷氏に代わる幕府政治の構造を提示できておらず、そのことが今谷氏の幕府論が依然として踏襲される要因と考えられる。そこで、本研究では幕政を將軍・大名による共同執政という観点から捉え直し、両者を一体的に検討することで幕政の総合的理解を図る。幕政を考察するための課題としては、幕府儀礼に注目する。従来の戦国期幕府政治史研究では幕府儀礼は形式的なものとして軽視され、その政治的意義が考察されることはなかった。だが、幕府儀礼の体系的研究を行っている二木謙一氏は、儀礼を典札・札式・故実・年中行事などの総称と規定し、室町幕府の年中行事は足利將軍を中心とする儀礼的秩序の絆であったと指摘した上で、室町期では成立期の儀礼に幕府内の力関係が反映されていたことを明らかにした⁽²⁵⁾。

戦国期においても幕府儀礼には將軍・大名の力関係や大名間の序列が反映されており、政治色は濃厚である。將軍・大名は儀礼の主要な構成員であり、幕府儀礼は両者が共同で実施する政策として捉えることができる。また、複数の時期にわたって継続的に行われている儀礼も多いため、各時期の相互比較によつて將軍・大名の力関係や政策志向の特質を把握することが可能である。幕府儀礼は將軍・大名を一体的に捉えた上で幕政を考察することに適した事例であり、儀礼を政治史の観点から考察することで、幕府政治史研究・幕府儀礼研究の双方に新たな視点を提示することができる⁽²⁶⁾。

第二の問題点は、幕府政治における細川京兆家の政治的位置が論じられていないことである。近年の幕府政治史研究の比重は將軍権力・細川京兆家以外の大名に移り、今谷氏の幕府論の相対化が進められているが、細川京兆家が幕政に大きな影響力を持っていたことには変わりない。だが、細川氏研究は幕政と別個に論じられており、細川京兆家の政治的位置は不明である。細川京兆家を排除して構築された幕政は一見整合的に見えるが、実際は

一部を取り上げ全体に敷衍させて理解しているにすぎない。細川京兆家研究の低調が幕政の全体像構築を妨げる要因となっている。

そこで、本研究では細川京兆家奉行奉書を考察することで細川京兆家の政治的位置の解明を図る。細川京兆家の幕政関与は多岐にわたるが、現状の研究史を踏まえると、優先的に考察すべきは細川京兆家奉行奉書の政治的意義ではないかと考えられる。細川京兆家奉行奉書による遵行は今谷氏の幕府論の中核だが、部分的な批判しか行われておらず、幕政上における機能は明確ではない。今谷氏の研究は細川京兆家と幕政の関係を正面から論じた唯一の研究であり、研究史に与えた影響も大きい。今谷氏の研究を総括し、その批判的検証を通じて細川京兆家の政治的位置を再考することが幕政の構造的な理解につながる。また、奉書による裁許の補完と幕政代行は大内義興や六角定頼には見られない細川京兆家独自の政治動向であり、細川京兆家の幕政上の位置を理解する上で有益な課題である。

第三の問題点は、幕府政治に参加した大名の政治的位置が定まっていないことである。現状の幕府政治史研究は大内義興や六角定頼などの個々の大名の事例研究にとどまり、幕政に参加した大名が利害関係を共有し、一個の政治勢力として連携していたことは捨象されている。他方、幕政への参加の有無を考慮せずに大名を一括して把握し、将軍との相互補完関係にあったとする見解も見られるが、幕政への影響力を考慮せず大名を平板に理解することは大名ごとの発言力の差を無視することになり、幕政の構造的な理解を妨げる。幕政における大名の政治的位置の解明が不十分であると言わざるを得ない。

幕府政治に参加した大名の政治的位置を明らかにするためには、細川京兆家当主や大内義興・六角定頼らの幕政に関与した大名を一体的に捉える観点を設けることで彼らを共通の政治勢力と認識すること、幕政への参加の有無によって大名を区別することで大名の差別化を図ること、の二つが求められる。

幕政に参加した大名の共通項は、京都に邸宅あるいは恒常的な宿所を持ち、在京しつつ幕政に参加する、あるいは、畿内近国に本拠を持ち、在国のまま幕政に参加することである。大名の大半が前者の形態で幕政に参加したことを踏まえると、「在京大名」という呼称が妥当であると考えられる⁽²⁷⁾。無論、六角定頼のように平時は在国していた大名も含むという点で在京という言葉は正確ではないが、彼らは在京と在国を繰り返すことで幕政参加を果たしており、その点において在京大名という概念に包摂される存在である。また、自身は在国していても將軍権力と緊密に連絡を取り合っており、在京大名から除外するのは幕政の総体を論じる上で不適切である。そこで、本研究では恒常的に幕政に参加し、政策決定に影響力を及ぼした大名を仮に在京大名と規定し、その具体的解明を進めることにする⁽²⁸⁾。

また、直接幕政に参加して政策決定に影響力を及ぼすことはないが、將軍権力や在京大名と交渉を持つ大名は、史料上「在国大名」と表現されている⁽²⁹⁾。幕政に直接参加しない大名は在国していること、在京大名と明確に区別できることを踏まえると、妥当な呼称であると考えられる。よって、本研究では在国して直接幕政に参加しない大名を指す呼称として「在国大名」という用語を用いることにする。

第四の問題点は、幕府政治史の考察対象とする時期が義晴後期に偏っていることである。現状の幕府政治史研究は、幕政の内情を記した『大館常興日記』や『親俊日記』という幕臣の日記があり、『言継卿記』や『天文日記』など公家・寺家の史料にも恵まれた、足利義晴治世期後半の義晴後期に集中しており、義晴後期の幕政をもって戦国期の幕政全体を代表させる傾向がある。しかし、義晴後期は將軍の権力基盤の整備、細川京兆家の政治力の低下などによって相対的に將軍の発言力が向上し、大名の影響力が低下していた時期である。將軍・大名の力関係は時期によって異なることを十分認識せず、義晴後期を典型として幕政を理解してきたことが、大名の政治的役割の過小評価を招いている。

義晴後期を中心とする従来の研究を相対化するためには、他の時期における在京大名の政治的位置を追究することが求められる。明応の政変（明応二年、一四九三）が幕府政治史上の画期とされることを踏まえると、義晴後期との対比に適した時期は、政変後の義澄期・義植後期・義晴前期になる。特に、明応の政変前後での幕政の変化を対比できる義植後期、義晴後期との比較検討に最も適する義晴前期の考察は優先的に行うべきと考える。

また、在京大名の幕政上の位置を最も明確に示すのは、政策決定への関与である。しかし、従来の研究で政策決定と在京大名の関係を包括的に論じたものは義晴後期に限られる。したがって、義植後期・義晴前期の幕政における政策決定過程を考察し、義晴後期との違いを明らかにすることが、在京大名の政治的位置の解明に寄与するものと考えられる。

第五の問題点は、制度史研究に偏っていることである。幕府の政策決定方式や政治機構の実態解明は基礎研究として重要だが、このような静態的研究だけでは政策や政局といった幕府政治の動態的側面を理解することはできない。現状の幕府政治の叙述は、合戦と政変による権力者（将軍・大名）の交代で描かれており、依然として武力を重視した一面的な政治史の理解がなされている。これは、制度と政治過程との対応関係が十分に理解されていないためだが、制度史研究だけではこうした政治史に対する理解を覆すことはできない。

そこで、本研究では政策に注目することで幕府政治の動態的理解を図る。合戦や政局は政治の一部であり、当該期の政策全体の中に位置づけることで整合的に理解することができる。また、幕府儀礼などの政策の内容と成果によって幕府政治を考察することにより、武力偏重の幕府政治史を相対化することができる。そして、政策は将軍・大名が共同で実施するものであり、政策の内容・主導者・優先順位等に当該期の幕府政治の特質が反映されている。重要政策の解明は、各時期における幕府権力の特質を明らかにし、幕府政治の構造的解明を可能にすると考えられる。

以上の問題視角に基づき、本研究では在京大名を中心に幕府政治の解明を試みる。その中でも中核となるのが、細川京兆家の考察である。細川京兆家当主は応仁・文明の乱後も在京を続け、約七〇年の長期にわたって幕政に影響力を行使していた代表的な在京大名であり、幕政における在京大名の政治的位置を明らかにするためには最優先で考察すべき対象である。よって、本研究では將軍や他の在京大名との対比を交えつつ、細川京兆家を中心に幕府政治の構造的性質の解明を行う。

二 本研究の構成と意図

本研究の本論は、前項で述べた問題視角に基づき、以下の三章九節で構成する。

第一章では幕府儀礼の政治的機能、第二章では細川京兆家奉行人奉書による幕政の補完と代行、第三章では政策決定過程における在京大名の政治的役割を分析対象とする。各章の順序は、將軍権力と複数の在京大名が連携して幕政を運営するという全体構造をまず示し、次に將軍権力を在京大名の家政機関が補完・代行するという下部構造を示し、その上で、將軍権力と在京大名の家政機関が連携して政策決定・実施を行っているという上部構造を明らかにすることで幕府政治の構造的な理解を図るという意図に基づく構成である。

第一章「戦国期の幕府儀礼と細川京兆家」は、將軍御所の猿樂興行、將軍の大名邸御成、足利將軍家元服儀礼の三つの幕府儀礼を検討し、儀礼が政治上に果たした機能を明らかにする。

猿樂興行は宴の余興、御成は正月の年中行事、元服は成人儀礼に由来する儀礼であり、儀礼的性格は各々異なる。しかし、將軍・在京大名の関係を構築し、政治秩序を形成するという機能を共有しており、一定の共通性を持つ儀礼として扱うことが可能である。本研究においては各儀礼の特質に留意しつつ、幕府の重要政策として幕府儀礼を考察する。

参考史料一覧

原本・影写本等（所蔵者五十音順に配列）

大山崎町歴史資料館蔵

〔大山崎町歴史資料館所蔵文書〕

京都市歴史資料館蔵

〔今宮神社文書〕（写真帳）

京都大学総合博物館蔵

〔宝珠院文書〕（写真帳）

京都府立総合資料館蔵

〔東寺百合文書〕（写真帳）

宮内庁書陵部蔵

〔足利義植畠山亭御成記〕

〔足利義晴佐々木亭御成記〕

〔足利義晴細川亭御成記〕

〔九条家文書〕（写真帳）

〔拾芥記〕

〔諸大名衆へ御成被申入記〕

〔土御門家文書〕（写真帳）

〔尚経公記〕（写真帳）

〔細川亭御成記〕

〔壬生家文書〕（写真帳）

〔壬生于恒記〕

〔守光公記〕

国立公文書館内閣文庫蔵

〔押小路文書〕

〔和長卿記〕

〔経尋記〕

〔御元服聞書〕

〔寺社雑事記〕

〔制札・御産所御道具外〕

〔大乘院寺社雑事記〕（写真帳）

〔大乘院寺社雑事記目録〕（写真帳）

〔曇華院殿古文書〕

〔二水記〕（写真帳）

〔山科家古文書〕

国立歴史民俗博物館蔵

〔北野文書〕(写真帳)

〔嚴助往年記〕

〔清閑寺文書〕(写真帳)

〔文安六年足利義成元服記〕(写真帳)

尊経閣文庫蔵

〔義晴御元服記録〕

〔義晴將軍元服并判始記〕

筑波大学附属図書館蔵

〔北野社家日記〕

〔筑波大学附属図書館所蔵文書〕

天理大学附属天理図書館蔵

〔大館常興日記〕

〔御作事方日記〕

〔雜事覚悟事〕

〔晴光覚書〕

東京大学史料編纂所蔵

〔秋山家文書〕(影写本)

〔開口神社文書〕(写真帳)

〔穴太寺文書〕(影写本)

〔穴太寺文書〕(写真帳)

〔天城文書〕(影写本)

〔余部文書〕(写真帳)

〔雨森善四郎氏所蔵文書〕(写真帳)

〔出雲神社文書〕(写真帳)

〔井関文書〕(写真帳)

〔伊勢守貞忠亭御成記〕(写真帳)

〔今西文書〕(影写本)

〔石清水文書〕(写真帳)

〔蔭涼軒日録〕(写真帳)

〔上杉家文書〕(写真帳)

〔永正十三年記〕(写真帳)

〔永正十五年畠山順光亭御成記〕(写真帳)

〔円満院文書〕(影写本)

〔大館常興日記〕(写真帳)

〔大友文書〕(写真帳)

〔小畠文書〕(写真帳)

〔勧修寺文書〕(写真帳)

〔勧修寺文書〕(影写本)

〔片山家文書〕(写真帳)

〔華頂要略〕(写真帳)

〔勝尾寺文書〕(写真帳)

〔狩野亨吉蒐集文書〕(写真帳)

〔賀茂別雷神社文書〕(写真帳)

〔革島文書〕(写真帳)

〔北河原森本文書〕(写真帳)

- 〔北野社家日記〕(写真帳)
- 〔北野社家引付〕(写真帳)
- 〔北野神社文書〕(写真帳)
- 〔教王護国寺文書〕(写真帳)
- 〔京都大学国史研究室本大通寺文書〕(写真帳)
- 〔玉林院文書〕(影写本)
- 〔清水寺文書〕(写真帳)
- 〔記録御用所本古文書〕(写真帳)
- 〔九条家文書〕(写真帳)
- 〔公方様御成之次第〕(写真帳)
- 〔公方様正月御事始記〕(謄写本)
- 〔建内文書〕(影写本)
- 〔光源院殿御元服記〕(写真帳)
- 〔高山寺文書〕(写真帳)
- 〔広隆寺文書〕(影写本)
- 〔久我家文書〕(影写本)
- 〔古簡雜纂〕(写真帳)
- 〔御隨身三上記〕(写真帳)
- 〔御内書案〕(写真帳)
- 〔近衛家文書〕(影写本)
- 〔小林凱之氏所藏文書〕(写真帳)
- 〔後法興院政家記〕(写真帳)
- 〔後法成寺閔白記〕(写真帳)
- 〔古文書纂〕(写真帳)
- 〔金蓮寺文書〕(影写本)

-
- 〔佐治文書〕(影写本)
 - 〔貞助記〕(写真帳)
 - 〔座田文書〕(写真帳)
 - 〔座中天文記〕(写真帳)
 - 〔雑々日記〕(影写本)
 - 〔実隆公記〕(写真帳)
 - 〔私心記〕(写真帳)
 - 〔地藏院文書〕(写真帳)
 - 〔実相院文書〕(影写本)
 - 〔輯古帖〕(影写本)
 - 〔集古文書〕(影写本)
 - 〔成就院文書〕(影写本)
 - 〔浄福寺文書〕(影写本)
 - 〔諸家文書纂〕(影写本)
 - 〔諸大名衆御成被申入記〕(写真帳)
 - 〔真珠庵文書〕(写真帳)
 - 〔真乘院文書〕(写真帳)
 - 〔新善光寺文書〕(影写本)
 - 〔誓願寺文書〕(写真帳)
 - 〔清涼寺文書〕(写真帳)
 - 〔禅定寺文書〕(写真帳)
 - 〔泉湧寺文書〕(写真帳)
 - 〔善峰寺文書〕(写真帳)
 - 〔宗五大草紙〕(写真帳)
 - 〔尊経閣古文書纂〕(写真帳)

- 〔大雲山誌稿〕(影写本)
- 〔大永四年細川亭御成記〕(写真帳)
- 〔醍醐寺文書〕(写真帳)
- 〔大通寺文書〕(写真帳)
- 〔大徳寺文書〕(写真帳)
- 〔多田神社文書〕(写真帳)
- 〔伊達家文書〕(写真帳)
- 〔田中慶太郎所蔵文書〕(影写本)
- 〔田中光治氏所蔵文書〕(写真帳)
- 〔田中教忠氏所蔵文書〕(写真帳)
- 〔多聞院日記〕(写真帳)
- 〔丹波片山家文書〕(写真帳)
- 〔親孝日記〕(写真帳)
- 〔親俊日記〕(写真帳)
- 〔親長日記〕(写真帳)
- 〔親元日記〕(写真帳)
- 〔長福寺文書〕(写真帳)
- 〔塚本文書〕(写真帳)
- 〔殿中申次記〕(写真帳)
- 〔天文十七年細川亭御成記〕(写真帳)
- 〔天文十八年佐々木亭御成記〕(写真帳)
- 〔天文日記〕(写真帳)
- 〔天龍寺文書〕(写真帳)
- 〔東寺文書〕(写真帳)
- 〔東寺百合文書〕(写真帳)

-
- 〔東大寺文書〕(写真帳)
 - 〔言国卿記〕(写真帳)
 - 〔言継卿記〕(写真帳)
 - 〔土佐家文書〕(写真帳)
 - 〔鳥居大路文書〕(写真帳)
 - 〔長興宿禰記〕(写真帳)
 - 〔二尊院文書〕(写真帳)
 - 〔新田家旧蔵文書〕(写真帳)
 - 〔蛭川家文書〕(写真帳)
 - 〔日本中央競馬会記念館所蔵文書〕(写真帳)
 - 〔宣胤卿記〕(写真帳)
 - 〔野間建明家文書〕(マイクロフィルム)
 - 〔羽倉文書〕(写真帳)
 - 〔東文書〕(写真帳)
 - 〔日野家領文書写〕(写真帳)
 - 〔平野社文書〕(マイクロフィルム)
 - 〔福勝寺文書〕(影写本)
 - 〔武雜礼〕(写真帳)
 - 〔遍照心院文書〕(影写本)
 - 〔法金剛院文書〕(写真帳)
 - 〔保阪潤治氏所蔵文書〕(影写本)
 - 〔本能寺文書〕(写真帳)
 - 〔前田家所蔵文書〕(写真帳)
 - 〔松尾神社文書〕(写真帳)
 - 〔松尾月読神社文書〕(写真帳)

〔三浦周行所藏文書〕(影写本)

〔水無瀬神社文書〕(写真帳)

〔壬生家文書〕(写真帳)

〔明王院文書〕(写真帳)

〔妙心寺文書〕(影写本)

〔妙蓮寺文書〕(写真帳)

〔元長卿記〕(写真帳)

〔康富記〕(写真帳)

〔山科家古文書〕(写真帳)

〔離宮八幡宮文書〕(写真帳)

〔龍潭寺文書〕(マイクログフィルム)

〔龍安寺文書〕(影写本)

〔西足院文書〕(影写本)

〔蓮華寺文書〕(写真帳)

〔鹿王院文書〕(マイクログフィルム)

〔鹿苑日録〕(写真帳)

〔早稲田大学荻野研究室所藏文書〕(影写本)

〔和田英松氏所藏文書〕(影写本)

刊行物(編・著者五十音順に配列)

飯倉晴武校訂『史料纂集 長興宿禰記』(統群書類従完成会、一九九八年)

今谷明・高橋康夫編『室町幕府文書集成 奉行人奉書篇』上・下(思文閣出版、一九八六年)

奥野高広校訂『史料纂集 賀茂別雷神神社文書』一(統群書類従完成会、一九八八年)

北西弘編『真宗史料集成三 一向一揆』(同朋社、一九七九年)

宮内庁書陵部編『九条家文書』一〜七(宮内庁書陵部、一九七〜七五年)

宮内庁書陵部編『九条家歴世記録二 尚経公記』(明治書院、一九九〇年)

桑山浩然編『室町幕府引付史料集成』上(近藤出版社、一九八〇年)

高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺資料叢書四 高山寺古文書』(東京大学出版会、一九七五年)

國學院大學久我家文書編纂委員会編『久我家文書』一〜四(國學院大學、一九八二〜八七年)

國書刊行会編『続々群書類従三 統南行雑録』(統群書類従完成会、一九八四年)

近衛尚通『後法成寺関白記』一〜三(思文閣出版、一九八五年)

近藤瓶城編『改定史籍集覧二四 拾芥記』(臨川書店、一九八四年)

近藤瓶城編『改定史籍集覧二五 殿助往年記』(臨川書店、一九八四年)

- 泉涌寺編『泉涌寺史 資料編』（法藏館、一九八四年）
- 高橋隆三編『実隆公記』一～十三（統群書類従完成会、一九三二～六三年）
- 高橋隆三ほか校訂『言繼卿記』（統群書類従完成会、一九六五～九八年）
- 竹内秀雄校訂『史料纂集 北野社家日記』一～六（統群書類従完成会、一九七二～七三年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 蔭涼軒日録』一～五（臨川書店、一九七八年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 大館常興日記』一～三（臨川書店、一九六七年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 後法興院政家記』一～八（臨川書店、一九六七年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 大乘院寺社雜事記』一～十二（臨川書店、一九七八年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 多聞院日記』一～五（臨川書店、一九七八年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 親孝日記』（臨川書店、一九七八年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 親後日記』一・二（臨川書店、一九七八年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 親長卿記』一～五（臨川書店、一九七五年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 親元日記』一～三（臨川書店、一九六七年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 宣胤卿記』一・二（臨川書店、一九六七年）
- 竹内理三編『増補統史料大成 康富記』一～四（臨川書店、一九六五年）
- 田沼陸校訂『史料纂集 石清水八幡宮文書 外』（統群書類従完成会、一九九九年）
- 辻善之助他校訂『鹿苑日録』一～六（統群書類従完成会、一九六一～九一年）
- 天理大学附属天理図書館編『ビブリア』八九号（天理図書館、一九八七年）
- 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 後法成寺関白記』一～三（岩波書店、二〇〇一～二〇〇七年）
- 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 二水記』一～四（岩波書店、一九八九～九七年）
- 東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第三 伊達家文書』一～十（東京大学史料編纂所、一九〇八～一四年）
- 東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第四 石清水八幡宮文書』一～六（東京大学史料編纂所、一九〇九～一五年）
- 東京大学文学部史料編纂所編『大日本古文書家わけ第十七 上杉家文書』一～三（東京大学史料編纂所、一九三二～三五五年）
- 東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第十七 大徳寺文書』一～十四（東京大学史料編纂所、一九四三～八五年）
- 東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第十七 大徳寺文書別集真珠庵文書』一～七（東京大学史料編纂所、一九八

九年（二〇〇九年）

- 東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第二 蜷川家文書』一～六（東京大学史料編纂所、一九八一～九六年）
東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第二 益田家文書』一～四（東京大学史料編纂所、二〇〇〇～二二年）
豊田武・田沼陸・飯倉晴武校訂『史料纂集 言国卿記』一～八（統群書類従完成会、一九六九～九五年）
芳賀幸四郎校訂『史料纂集 元長卿記』（統群書類従完成会、一九七三年）
塙保己一編『群書類従』第二十二輯武家部（統群書類従完成会、一九七二年）
塙保己一編『統群書類従』第二十三輯下武家部（統群書類従完成会、一九七二年）
塙保己一編『統群書類従』第三十五輯拾遺部（統群書類従完成会、一九七二年）
村井祐樹編『戦國遺文 佐々木六角氏編』（東京堂出版、二〇〇九年）
山田雄司『史料纂集 北野社家日記』（統群書類従完成会、二〇〇一年）
山田雄司・山澤学校訂『史料纂集 北野社家日記』（八木書店、二〇一二年）

参考文献一覧（著者名・編者名の五十音順に配列）

著書

- 天野忠幸『戦国期三好政権の研究』（清文堂出版、二〇一〇年）
家永遵嗣『室町幕府將軍権力の研究』（東京大学日本史学研究室、一九九五年）
今谷明『室町幕府解体過程の研究』（岩波書店、一九八五年）
今谷明『守護領国支配機構の研究』（法政大学出版局、一九八六年）
今谷明『室町時代政治史論』（塙書房、二〇〇〇年）
奥野高廣『戦国時代の宮廷生活』（続群書類従完成会、二〇〇四年）
小川信『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）
小山田義夫『一国平均役と中世社会』（岩田書院、二〇〇八年）
勝俣鎮夫『戦国時代論』（岩波書店、一九九六年）
川岡勉『室町幕府と守護権力』（吉川弘文館、二〇〇二年）
川岡勉『山名宗全』（吉川弘文館、二〇〇九年）
久留島典子『一揆と戦国大名』（講談社、二〇〇一年）
桑山浩然『室町幕府の政治と経済』（吉川弘文館、二〇〇六年）
小島道裕『描かれた戦国の京都』（吉川弘文館、二〇〇九年）
小谷利明『畿内戦国期守護と地域社会』（清文堂出版、二〇〇三年）
小山靖憲編『戦国期畿内の政治社会構造』（和泉書院、二〇〇六年）
田沼睦『中世後期社会と公田体制』（岩田書院、二〇〇七年）
西島太郎『戦国期室町幕府と在地領主』（八木書店、二〇〇六年）
能勢朝次『能楽源流考』（岩波書店、一九三八年）
林屋辰三郎『中世芸能史の研究』（岩波書店、一九六〇年）
二木謙一『中世武家儀礼の研究』（吉川弘文館、一九八五年）

- 二木謙一『中世武家の作法』（吉川弘文館、一九九九年）
- 古野 貢『中世後期細川氏の権力構造』（吉川弘文館、二〇〇八年）
- 水野智之『室町時代公武関係の研究』（吉川弘文館、二〇〇五年）
- 村井祐樹『戦国大名佐々木六角氏の基礎研究』（思文閣出版、二〇一三年）
- 盛本昌広『贈答と宴会の中世』（吉川弘文館、二〇〇八年）
- 山田康弘『戦国期室町幕府と将軍』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
- 山田康弘『戦国時代の足利将軍』（吉川弘文館、二〇一一年）
- 湯川敏治『戦国期公家社会と荘園経済』（統群書類従完成会、二〇〇五年）
- 弓倉弘年『中世後期畿内近国守護の研究』（清文堂出版、二〇〇六年）
- 吉田賢司『室町幕府軍制の構造と展開』（吉川弘文館、二〇一〇年）
- 脇田晴子『天皇と中世文化』（吉川弘文館、二〇〇三年）

論 文

- 青山英夫『『明応の政変』に関する覚書』（『上智史学』二八号、一九八三年）
- 阿部綾子『将軍家元服儀礼における加冠・理髪役について』（『福島県立博物館紀要』二二号、二〇〇七年）
- 飯倉晴武『応仁の乱以降における室町幕府の性格』（『日本古文書学会編』『日本古文書学論集』8 中世Ⅳ、吉川弘文館、一九八七年、初出は一九七四年）
- 家永遵嗣『明応二年の政変と伊勢宗瑞（北条早雲）の人脈』（『成城大学短期大学部紀要』二七号、一九九六年）
- 家永遵嗣『将軍権力と大名との関係を見る視点』（『歴史評論』五七号、一九九七年）
- 池 享『地域国家の分立から統一国家の確立へ』（宮地正人・佐藤信・五味文彦・高埜利彦編『国家史』、山川出版社、二〇〇六年）
- 市村高男『戦国期の地域権力と「国家」・「日本国」』（『日本史研究』五一九号、二〇〇五年）
- 今岡典和『御内書と副状』（大山喬平教授退官記念会編『日本社会の史的構造古代・中世』、思文閣出版、一九九七年）
- 今岡典和『足利義植政権と大内義興』（上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』、吉川弘文館、二〇〇一年）
- 上島 有『解説』（『日本古文書学会編』『日本古文書学論集』8 中世Ⅳ、吉川弘文館、一九八七年）

- 岡田謙一「室町後期の和泉下守護細川民部大輔基経」(『日本歴史』五六六号、一九九五年)
- 岡田謙一「細川高国派の和泉守護について」(『ヒストリア』一八二号、二〇〇二年)
- 岡田謙一「細川右馬頭尹賢小考」(阿部猛編『中世政治史の研究』、日本史史料研究会、二〇一〇年)
- 岡田謙一「細川晴国小考」(天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』、日本史史料研究会、二〇一二年)
- 奥村徹也「天文期の室町幕府と六角定頼」(米原正義先生古希記念論文集刊行会編『戦国織豊期の政治と文化』、続群書類従完成会、一九九三年)
- 金子 拓「室町殿東寺御成のパスベクティヴ」(同著『中世武家政権と政治秩序』、吉川弘文館、一九九八年)
- 金子 拓「寛正三年足利義政東寺御成と東寺の寺院経済」(羽下徳彦編『中世の社会と史料』、吉川弘文館、二〇〇五年)
- 雉岡恵一「室町幕府奉行人中沢氏の成立について」(東寺文書研究会編『東寺文書にみる中世社会』、東京堂出版、一九九九年)
- 木下昌規「戦国期待所開闢の基礎的研究」(『戦国史研究』五二号、二〇〇六年)
- 小泉義博「室町幕府奉行人奉書の充所」(日本古文书学会編『日本古文书学論集8中世IV』、吉川弘文館、一九八七年、初出は一九七六年)
- 小島道裕「洛中洛外図屏風歴博甲本の成立と初期洛中洛外図屏風諸本」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一四五号、二〇〇八年)
- 小谷利明「畠山植長の動向」(矢田俊文編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)
- 小谷利明「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇号、二〇〇五年)
- 五島邦治「武家猿楽と室町殿における興行」(『芸能史研究』八五号、一九八四年)
- 五島邦治「室町幕府の式楽と猿楽の武家奉公」(『日本歴史』四七三号、一九八七年)
- 小森崇弘「後土御門天皇期の禁裏における猿楽興行の諸様相」(同著『戦国期禁裏と公家社会の文化史』、小森崇弘君著書刊行委員会、二〇一〇年、初出は二〇〇五年)
- 設楽 薫「將軍足利義材の政務決裁」(『史学雑誌』九六編七号、一九八七年)
- 設楽 薫「室町幕府の評定衆と「御前沙汰」」(『古文书研究』二八号、一九八七年)
- 設楽 薫「足利義材の没落と將軍直臣団」(『日本史研究』三〇一号、一九八七年)

- 設楽 薫「足利義尚政権考」(『史学雑誌』九八編二号、一九八九年)
- 設楽 薫「將軍足利義晴の政務決裁と「内談衆」」(『年報中世史研究』二〇号、一九九五年)
- 設楽 薫「將軍足利義晴の嗣立と大館常興の登場」(『日本歴史』六三一号、二〇〇〇年)
- 設楽 薫「足利義晴期における内談衆の人的構成に関する考察」(『遙かなる中世』一九号、二〇〇一年)
- 設楽 薫「將軍足利義晴期における「内談衆」の成立(前編)」(『室町時代研究』一号、二〇〇二年)
- 設楽 薫「室町幕府奉行人松田丹後守流の世系と家伝史料」(『室町時代研究』二号、二〇〇八年)
- 清水久夫「將軍足利義晴期における御前沙汰」(『日本古文書学会編』『日本古文書学論集8中世IV』、吉川弘文館、一九八七年、初出は一九七九年)
- 末柄 豊「細川氏の同族連合体制の解体と畿内領国化」(石井進編『中世の法と政治』、吉川弘文館、一九九二年)
- 末柄 豊「大永五年に完成した將軍御所の所在地」(『画像史料解析センター通信』五四号、二〇〇一年)
- 高橋康夫「描かれた京都」(『中世都市研究』一二 中世の中の京都』、新人物往来社、二〇〇六年)
- 田中淳子「山城国における「室町幕府」守護体制」の変容」(『日本史研究』四六六号、二〇〇一年)
- 中西裕樹「摂津国上郡における守護代薬師寺氏」(天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』、日本史史料研究会、二〇一二年)
- 仲村 研「九条家代官石井氏について」(同著『中世地域史の研究』、高科書店、一九八八年、初出は一九七九年)
- 野田泰三「戦国期における守護・守護代・国人」(『日本史研究』四六四号、二〇〇一年)
- 野田泰三「西岡国人士豪と三好氏」(東寺文書研究会編『東寺文書にみる中世社会』、東京堂出版、一九九九年)
- 芳賀幸四郎「中世末期における三条西家の経済的基盤とその崩壊」(『日本学士院紀要』一三卷一号、一九五五年)
- 羽下徳彦「室町幕府侍所頭人付山城守護補任沿革考証稿」(『東洋大学紀要』文学部篇、一六集、一九六二年)
- 羽下徳彦「室町幕府初期検断小考」(『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七年)
- 羽下徳彦「室町幕府侍所考」(『論集日本歴史』五 室町政権』、有精堂出版、一九七五年、初出は一九六三年・一九六四年)
- 萩原大輔「足利義尹政権考」(『ヒストリア』二二九号、二〇一一年)
- 長谷川博史「戦国期西国の大名権力と東アジア」(『日本史研究』五一九号、二〇〇五年)
- 畑 和良「浦上村宗と守護権力」(『岡山地方史研究』一〇八号、二〇〇六年)
- 羽田 聡「足利義晴期における内談衆編制の意義について」(『三田中世史研究』六号、一九九九年)

- 馬部隆弘「細川晴国・氏綱の出自と関係」(天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』、日本史料研究会、二〇一二年)
- 浜口誠至「細川高国奉行人と細川京兆家の訴訟審理・裁許」(『史境』五四号、二〇〇七年)
- 浜口誠至「戦国期における武家主催の猿楽興行」(『史境』六二号、二〇一一年)
- 浜口誠至「戦国期における足利將軍家元服儀礼の政治的背景」(山本隆志編『日本中世政治文化論の射程』、思文閣出版、二〇一二年)
- 浜口誠至「足利義晴前期の幕府政治」(『社会文化史学』五五号、二〇一二年)
- 浜口誠至「戦国期の大名邸御成と在京大名」(天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』、日本史料研究会、二〇一二年)
- 本史料研究会、二〇一二年)
- 二〇一三年)
- 原田信男「食事の体系と共食・饗宴」(『日本の社会史』第八卷、岩波書店、一九八七年)
- 二木謙一「年中行事にみる戦国期の室町幕府」(『國史学』一九二号、二〇〇七年)
- 古野貢「室町幕府——守護体制下の分国支配構造」(『市大日本史』一二号、二〇〇九年)
- 水野恭一郎「浦上村宗とその周辺」(同著『武家社会の歴史像』、国書刊行会、一九八三年、初出は一九七七年)
- 村井章介「執権政治の変質」(同著『中世の国家と在地社会』、校倉書房、二〇〇五年、初出は一九八四年)
- 百瀬今朝雄「応仁・文明の乱」(『岩波講座日本歴史』七、中世三、岩波書店、一九七六年)
- 森 茂暁「足利將軍の元服」(同著『中世日本の政治と文化』、思文閣出版、二〇〇六年、初出は二〇〇三年)
- 森田恭二「細川高国と畿内国人層」(『ヒストリア』七九号、一九七八年)
- 森田恭二「細川政元政権と内衆赤沢朝経」(『ヒストリア』八四号、一九七九年)
- 森田恭二「戦国期畿内における守護代・国人層の動向」(『ヒストリア』九〇号、一九八〇年)
- 山下知之「細川氏同族連合体制についての一考察」(『鳴門史学』一四集、二〇〇〇年)
- 山下知之「阿波国守護細川氏の動向と守護権力」(『四国中世史研究』六号、二〇〇一年)
- 山田貴司「足利義材の流浪と西国の地域権力」(天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』、日本史料研究会、二〇一二年)

- 山田 徹 「南北朝期における所領配分と中央政治」(『歴史評論』七〇〇号、二〇〇八年)
- 山田康弘 「將軍義輝殺害事件に関する一考察」(『戦国史研究』四三号、二〇〇二年)
- 山田康弘 「戦国期大名間外交と將軍」(『史学雑誌』一一二編一、二〇〇三年)
- 山田康弘 「戦国期における將軍と大名」(『歴史学研究』七七二号、二〇〇三年)
- 山田康弘 「戦国期栄典と大名・將軍を考える視点」(『戦国史研究』五一号、二〇〇六年)
- 山田康弘 「戦国期本願寺の外交と戦争」(五味文彦・菊池大樹編『中世の寺院と都市・権力』、山川出版社、二〇〇七年)
- 山田康弘 「戦国期幕府奉行人奉書と信長朱印状」(『古文書研究』六五号、二〇〇八年)
- 山田康弘 「戦国時代の足利將軍家と本願寺・加賀一向一揆」(『加能史料研究』二二号、二〇〇九年)
- 山田康弘 「戦国期伊予河野氏と將軍」(『四国中世史研究』一〇号、二〇〇九年)
- 山田康弘 「戦国期將軍の大名間和平調停」(阿部猛編『中世政治史の研究』、日本史料研究会、二〇一〇年)
- 山田康弘 「戦国時代の足利將軍に関する諸問題」(天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』、日本史料研究会、二〇一二年)
- 湯川敏治 「『守光公記』掲載の女房奉書の意義」(『古文書研究』六二二号、二〇〇六年)
- 横尾國和 「摂津守護代家長塩氏の動向と性格」(『史学研究集録』五号、一九七九年)
- 横尾國和 「摂津守護代家業師寺氏の動向と性格」(『國學院大學大學院紀要』一二輯、一九八〇年)
- 横尾國和 「細川氏内衆安富氏の動向と性格」(『國史学』一一八号、一九八二年)
- 横尾國和 「明応の政変と細川氏内衆上原元秀」(『日本歴史』四二七号、一九八三年)
- 横尾國和 「細川内衆内藤氏の動向」(『國學院雑誌』八九卷一、一九八八年)
- 横尾國和 「細川政元政権評定衆と秋庭氏」(米原正義先生古希記念論文集刊行会編『戦国織豊期の政治と文化』、続群書類従完成会、一九九三年)
- 脇田晴子 「戦国期における天皇權威の浮上(上)」(『日本史研究』三四〇号、一九九〇年)
- 脇田晴子 「戦国期における天皇權威の浮上(下)」(『日本史研究』三四一、一九九一年)

あとがき

本書は、二〇一一年（平成二三三年）一二月に筑波大学へ提出し、翌二〇一二年三月に博士（文学）の学位を授与された学位論文「在京大名細川京兆家と幕府儀礼の政治史的研究」に若干の加除修正を加え、刊行するものである。

筑波大学大学院人文社会科学科学研究科学位論文審査委員会における審査では、主査の日本中世史の山本隆志先生、副査の日本近世史の浪川健治先生、日本民俗学の徳丸亞木先生、中世文学の近本謙介先生に審査をしていただいた。懇切丁寧に御指導して下さいました先生方に、まずはお礼を申し上げます。

私が歴史に興味を持つきっかけとなったのは、本である。昔から趣味は読書だが、好きな分野の一つが歴史だった。学校の図書室や地元の図書館の本を色々読んでみたが、なかでも印象に残っているのが、司馬遷の『史記』である。『史記』は、歴史を多方面にわたってバランスよく叙述し、その一方で臨場感も持ち合わせていた。現代とは違う文化、価値観に新鮮さを感じたのだろう。

私が子供の頃は、ドイツ統一、ソビエト連邦の解体など、国際情勢が大きく変化した時代であった。日本でもバブル経済が崩壊するなど、大きな変革期を迎えていた。子供心に、現代の社会は果たしてこのまま続くのか、疑問に思っていた。今年の国際情勢も不穏であり、残念なことだが、相変わらず先行き不透明な時代である。だが、現在だけを見ていても未来はわからないが、過去は未来の可能性を予想する手がかりとなる。過去の歴史と現在の双方を深く理解することで、未来を見通したいと考えていたのではないかと思う。歴史は時代や国を問わず関心があったが、日本でいえば、戦国時代が

特に変化が大きかった時代といわれていたので、未来の見通せない時代、人々はどのように考え、生きていたのかに興味を持っていた。

進学した筑波大学の日本史は、時代の垣根を越えて幅広く学ぶのが特徴であった。今では制度が変わったが、私が学生だったころは他の学類の先生も授業を開講しており、ゼミも複数所属しないと卒業できない仕組みになっていた。私が所属していた人文学類には中世史を専門とする先生はいなかった。人文学類で中世史の授業を開講していた日本語・日本文化学類の山本隆志先生の授業を受講した。山本先生の授業では、古文書学や史料の読み方を教えて頂いたが、特に印象に残っているのが、「北野神社文書」の実物を見たことである。山本先生は折に触れて史料の原本を見ることの大切さを説かれているが、それは大学生に対しても同じであった。そして、原本を見る機会を設けることで、史料に接する楽しさを教えて下さった。

山本先生には、その後も大学院進学後から博士論文、そして現在に至るまでお世話になっているが、先生にとって私は手がかかる教え子だったのではないかと思う。山本先生は、自治体史のお仕事に見られるように、中世史全般を幅広く研究対象とされているが、本来のご専門は鎌倉期の東国武士論である。それに対し、私の研究対象は戦国期の在京大名であり、同じ武家であっても、時代・地域ともに対極に位置していた。博士論文の提出も定年の年と重なってしまい、山本先生には多大なご苦労をおかけしたが、私にとっては、先生の指導を受けられたことは幸いであった。大局的な視点からの指導により研究に広がりができ、一方で一言一句をおろそかにせず、史料群の性格まで踏まえた厳密な史料解釈を指摘されることで、研究に深みが生まれた。修士論文のころは、論文が荒削りだったために、先生にはよく「君の論文は駄菓子のようにだ」と言われたが、今は新米職人の和菓子と呼べるくら

いになったのであろうか。いまだ不十分な点も多いが、今後の研究に深みと広がりを加えることで、教えて頂いたことを生かしていければと思う。

中世史では、大学でゼミを受講してから修士論文に至るまで、今井雅晴先生にもご指導いただいた。畿内を研究対象とする上で、先生の授業で宗教史の視点を身につけることができたことは、非常に幸いであつた。お礼を申し上げます。

そして、筑波大学で中世史を学ぶなかで、多くの先輩方や友人、後輩にめぐり会えたことはかけがえないことであつた。なかでも、阿部能久氏には古文書の読み方を、荻米一志氏には古記録の読み方を主に教えていただき、その他にも研究方法や調査方法など、様々なことを教えて頂いた。お名前を全て挙げることはできないが、その他にも大勢の方にお世話になつたおかげで、本書の刊行にまでたどり着くことができた。感謝を申し上げます。

中世史以外の諸先生の指導を受けられたことも幸運であつた。浪川健治先生には卒論から博論に至るまで、指導していただいた。浪川先生の指導では、特に理論的な枠組みを問われたことが印象深い。実証に偏りがちな私の研究にとっては、ありがたいことであつた。毎年行われている実習でフィールドワークを行い、地域史の視点を学ぶことができたことも、今振り返ると貴重な経験だつた。根本誠二先生には、研究の意義を繰り返し問われたことが思い出される。中野目徹先生のもとで学会の事務を経験したことは、奉行人奉書を理解する際に生かされている。山澤学先生のもとで開かれていた北野社家日記の講読会では、史料に親しむとともに、宗教史や儀礼に対する視点を学ぶことができた。

全体ゼミでは、池田元先生、伊藤純郎先生、千本秀樹先生、朴宣美先生から有益なご指摘をいただいた。筑波大学の日本史の特徴である全体ゼミは、通史的な視点を養い、他時代の研究状況や方法論を

学ぶ貴重な機会であった。時代の異なる諸先輩方や学友の報告からは、思想史の方法論など、自分の専門だけを見てはわからなかったであろう、多くのことを学ぶことができた。先生方、先輩方、多くの学友にお礼を申し上げたい。

また、学外の先生方にも大変お世話になった。学習院大学の家永遵嗣先生はゼミへの参加を快く許して下さった。当時の家永ゼミには他大学の院生も大勢参加しており、先生とゼミ生の間で交わされる活発な議論は刺激的でとても興味深かった。また、家永先生のもとで古記録の読み方を学ぶことができたことも、貴重な財産となった。国立歴史民俗博物館の井原今朝男先生には、特別共同利用研究員として研究指導や史料の閲覧でとてもお世話になった。多くの史料原本に接した経験も貴重であったが、お忙しいなか教えて頂いた朝廷や公家に対する刺激的な知見は、今でもよく覚えている。あの時にご指導頂いたことが本書ではまだ十分に生かせていないことが残念だが、これからの研究で少しでも学恩を返していけるよう、心がけたい。全てを挙げることはできないが、この他にも多くの方にお世話になった。また、日本史の学会や研究会は原則的に参加自由であり、こうした開かれた学問環境の多大な恩恵を受けたことも幸いであった。特に、戦国史研究会と親俊日記を読む会（旧大館常興日記を読む会）のみなさまには、長年、お世話になっている。お礼を申し上げたい。

戦国期の細川京兆家の研究を始めてから、本書の刊行でちょうど十年になる。細川京兆家に関心を抱いたのは、前代の中央政権である室町幕府と大名の関係が戦国時代を理解する上で鍵になると考えたためである。だが、細川京兆家に関するまとまった史料集は刊行されていないため、史料収集と並行して研究を進めることになった。史料を収集する過程で、今までの通史とは異なる、細川京兆家や室町幕府に対する知見が養われ、自分自身の研究課題も細川京兆家から大内家や六角家なども含む在

京大名へと広がっていった。今振り返ってみると、数多くの史料との出会いと導きによって研究を進めることができたのではないかと思う。取り組みがいのあるテーマにめぐり会えたことは、幸いなことであった。

だが、道のりはまだ半ばである。十年後もまた成果を公表できるよう、初志を忘れず、日々精進することにした。

本書の刊行にあたっては、思文閣出版の原宏一氏に大変お世話になった。また、校正・索引については、梯弘人氏・山野龍太郎氏にご協力いただいた。心よりお礼を申し上げたい。最後に、自由に研究をさせてくれた家族に感謝の意を表したい。

二〇一四年三月

浜口誠至

む

棟別銭 20, 190, 198, 236, 239, 240, 242~244,
248, 251~254, 257, 258, 260, 262~264,
266, 267, 279
棟別奉行 244, 257
室町御所 98, 99, 255
室町幕府奉行人奉書 3, 4, 18, 132, 199, 212,
213, 215, 217, 218

め

明応の政変 3, 5, 8, 15, 20, 53, 79, 89, 96, 102,
103, 118, 193, 219, 220, 222, 224, 265,
269, 276

も

申次 72
門役 75

や

大和四座 47

ゆ

右筆 97
泔坏 96, 97, 129

よ

義澄派 52~55, 57, 88, 90, 117, 118, 202, 205,
225, 229, 231, 276
義植派 53~55, 57, 59, 88, 117, 118, 120, 202,
205, 225, 277, 286
義維派 281, 286
義晴派 63

り

理髮 33, 34, 96, 97, 101, 123, 129

ろ

蠟燭奉行 73

高倉御所	244
多田院	214
竪紙	179, 182
段銭	190, 198, 274
ち	
茶湯	73
つ	
辻固	72~74
て	
田楽	68, 73
天文法華の乱	63, 190
天竜寺香巖院	102
と	
東寺	186, 199, 200, 215
等持寺合戦	232
東福寺	89
東福寺海蔵院	88
同朋衆	69, 71, 85
年寄	67
年寄衆	71, 73, 74, 87, 257, 262
な	
内談衆	5, 7, 22, 113, 130, 217, 221, 268
に	
如意嶽の合戦	205
女房奉書	148, 149, 268
は	
幕府奉行人	96
幕府奉行人奉書	19, 133~136, 140~147, 181, 182, 187, 189, 191, 194, 197, 198, 200, 207, 209, 210, 212~214, 217, 240, 241, 243, 248, 259, 261, 274
走衆	69, 76~78, 85, 86
花御所	244, 246, 247, 263~265
判始	98, 110, 111, 129, 130

ひ	
評定衆	142
評定始	98, 110
ふ	
奉行衆	5
奉行人	133, 134, 148, 150, 151, 179~181, 186, 192, 198, 203~205, 208, 215, 233, 240, 250, 261
普請始	20, 234, 236, 244, 249, 250, 252, 253, 260, 261, 266, 272
普請奉行	246, 250, 251
船岡山合戦	20, 55~59, 90~93, 118~120, 202, 219, 220, 225, 228, 229, 265, 275~277
へ	
屏中門役	73
ほ	
奉公衆	51, 96, 223
細川京兆家奉行人	19
細川京兆家奉行人奉書	3, 4, 13, 16, 18, 19, 20, 132~137, 140~147, 149~151, 179~188, 190~192, 194, 196~199, 201, 204, 205, 209, 210, 212, 213, 274, 275, 279, 280, 282
細川氏同族連合体制	8, 9, 10, 23, 25, 26, 213
細川政元の隠居未遂	51
法華一揆	63
堀越公方	102
本願寺	63
ま	
真木島城	51
政所	191
政所沙汰	5, 84, 134, 191~193, 205, 209, 215
政所執事代	209
政所代	5
政所頭人	5, 30, 69, 84, 181, 192, 233, 234, 250, 271

- 120, 121, 123, 128, 129, 256, 276, 280 ~
282
- 元服記 18, 33, 129
元服惣奉行 97
元服奉行 97, 100
- こ
- 香巖院 103
興福寺大乘院 61, 106, 224
国役 20, 236, 239~244, 248, 251~255, 259,
261, 266, 278
御前沙汰 5, 22, 134, 191~193, 205, 210
御前沙汰始 98, 110~112, 130
御膳奉行 73
御内書 6, 23, 58, 125, 226, 231, 232, 268, 271,
276, 280
小門役 72
御門役 72
御料所 150, 151
金春座 47
金龍寺妙善院 52
- さ
- 在京大名 3, 14~17, 20, 21, 29, 30, 32~34,
45~47, 51~53, 55~57, 59, 60, 64, 65,
70, 74, 75, 79, 83~87, 89~93, 100, 114,
117, 118, 122, 126, 127, 192, 219, 220,
222, 223, 226~229, 255, 256, 265~268,
270, 273, 275, 276, 278~286
在国大名 14, 46, 51, 54, 55, 60, 84, 125, 220,
221, 241, 253~256, 259, 260, 266, 267,
272, 277~279, 282, 286, 287
作事奉行 239~252, 255~262, 264, 266, 278,
279
雑掌方奉行 73
侍所 192, 215
侍所沙汰 134, 192, 194
侍所所司代 4, 192
侍所頭人 4, 192, 213
猿楽 16, 17, 30~32, 35, 45, 47~65, 67, 68,
73, 75, 77, 85~88, 90~93, 112, 117~
119, 122, 124~126, 220, 248, 253, 266,
275~277, 279, 280, 282
- 三条御所 99, 110, 112, 190, 234, 235, 250,
255, 272, 274
- し
- 地方沙汰 134, 192, 193
地方頭人 181, 188, 192, 247, 251
式三献 97~101, 110, 111, 129
慈照寺 115
実相院 99
宿老衆 73
守護遵行状 145
遵行 4, 18, 19, 132~134, 136, 137, 140, 143
~147, 150, 151, 194, 197, 209~211, 213,
274, 280
將軍御所 16, 17, 20, 31, 32, 45~55, 59~65,
110, 114, 115, 117, 119, 121, 126, 219,
221, 222, 229, 234~236, 244, 250~255,
257, 258, 265~268, 272, 277~282, 286
將軍宣下 33, 98, 105, 108, 110, 111
相国寺 245
相国寺万松軒 75
松梅院 137, 140
進物奉行 69
- す
- 澄元派 107, 114
- せ
- 泉涌寺 199
- そ
- 惣奉行 20, 75, 236, 240, 243, 244, 247~249,
251, 253, 255, 259, 261, 266~278
副状 6, 23, 58, 125, 203, 208, 220, 268, 271,
276, 280, 284
- た
- 大永の乱 281, 286
醍醐寺三宝院 97~99
醍醐寺地藏院 98, 99
醍醐寺理学院 225
大徳寺 135, 136, 181
高国派 107, 114

【事 項】

		御手長奉行	73
		御供衆	47, 51, 53, 56, 66~72, 76~78, 85, 86, 91, 97, 127, 246, 275
		御成	16, 17, 30, 32, 33, 35, 47, 56, 62, 66~79, 83~95, 97, 112, 117, 119, 120, 122, 123, 126, 128, 220, 228, 229, 255, 275 ~ 277, 280
		御成記	17, 66, 68, 70, 73, 74, 76~79, 119
		御成始	70
		御成役者日記	75, 77, 78
		折紙	179, 182
		陰陽師	97
		か	
		加冠	18, 33, 34, 96, 98~101, 103, 104, 107, 108, 110, 112~116, 120~123, 129, 130, 256, 280
		書止文言	179~182, 214
		楽屋奉行	72
		勸修寺	183
		借物奉行	73
		岩栖院	110, 234, 235
		観世座	47
		管領	32, 33, 96, 101, 102, 110~112, 115, 121, 127, 129, 130, 200, 201, 256, 279, 280, 284
		管領家	58, 103, 108, 114
		管領施行状	280
		管領代	114, 132~134
		管領奉書	132, 133, 145, 183
		き	
		北野社	137~143, 212
		禁色宣下	98, 108, 110
		く	
		国分奉行	241, 250, 252
		供物奉行	75
		桑実寺	85, 113, 148
		け	
		京兆專制	4, 8, 9, 22, 269
		元服	17~18, 30, 33, 34, 85, 92, 96, 98~117,
あ			
芥川	144		
芥川城	148		
足利義澄の金龍寺出奔	51, 52		
足利義植出奔事件	20, 220		
足利義植の淡路出奔	232		
足利義植の甲賀出奔	225, 265		
安国寺	277, 278		
い			
一向一揆	63		
犬追物	105, 245, 246, 253, 266		
石清水八幡宮	97~100, 111, 112, 130, 204, 243, 255, 258		
石清水八幡宮放生会	83		
う			
氏綱派	114~116		
内衆	4, 5, 7~10, 25~28, 51, 62, 69~75, 77 ~79, 87, 90, 95, 104, 107, 113, 114, 120, 134, 142, 146, 148, 149, 183, 185 ~ 187, 189, 190, 192, 194, 196~204, 207~209, 211, 214, 227, 239, 247, 248, 252, 257, 264, 269, 273, 277, 281, 287		
打乱	96, 97, 129		
裏御門役	72		
お			
御出奉行	66		
御祝奉行	97		
応仁・文明の乱	3, 8, 9, 10, 16, 32, 34, 53, 57, 103, 222, 223, 246, 285		
垵飯	101, 102, 110~112, 120, 122		
小笠原邸	264		
御盃台御折奉行	73		
御座敷奉行	73		
御相伴衆	53, 58, 66, 67, 69, 70, 72, 85, 89, 91, 127		
御手長	74		

三好長慶 29, 113, 116, 126, 275
 三好政長 116
 三好元長 186
 三好之長 107, 229, 230, 232
 三好義長 123, 126

や

薬師寺 7
 薬師寺氏 23
 薬師寺長盛 139
 薬師寺元長 139
 安富氏 7, 23
 安富元家 51, 140
 柳本賢治 198, 281, 286
 柳本元俊 199
 山科家 144, 212, 213
 山科言継 143~145, 148~150
 山名氏 28, 32, 102, 246
 山名宗全 28
 山名誠豊 94

ゆ

結城国縁 245, 250
 遊佐氏 28
 遊佐中務丞 224
 遊佐長教 114

よ

吉井 137, 138
 吉田三河守 241

り

李阿弥 226

れ

冷泉為広 72

ろ

六角家 6, 102, 283
 六角定頼 6, 7, 13, 14, 23, 45, 63~65, 75, 76,
 79, 83~85, 100, 113~116, 121, 122, 127,
 242, 254, 259, 266, 274, 275, 278, 281,
 282, 284~287

六角高頼 137, 223, 225
 六角義賢 76

わ

若狭武田家 60
 鷲尾隆康 85, 94, 95

	ふ	
藤岡与三		111, 112
淵田与左衛門尉		70
古津元幸		148
	ほ	
波々伯部因幡守		199, 200
波々伯部正盛	203, 216, 239, 244, 249, 257	
波々伯部元継		148, 149
細川淡路守護家		26, 97
細川阿波守護家	9, 10, 24, 26, 232	
細川和泉上守護家	10, 25, 26, 140, 183	
細川和泉下守護家	10, 25~27, 183	
細川氏綱	72, 114, 216, 287	
細川奥州家		96
細川勝信	138, 140, 141	
細川勝元	26, 73, 99, 101, 110	
細川国慶		114
細川家	4, 5, 7~12, 21~28, 32, 62, 72, 74, 84, 97, 102, 110, 145, 183, 200, 212 ~ 214, 221, 243, 246, 251, 257, 268, 269	
細川京兆家	3~14, 16, 18~20, 24, 25, 27, 28, 51, 57, 58, 60, 63, 70, 73~75, 83, 85, 97, 103, 104, 107, 114, 118, 119, 130, 132 ~ 134, 141 ~ 149, 151, 181, 183 ~ 194, 196~202, 205~207, 209~211, 213, 214, 216, 218, 223, 224, 230, 235, 244, 252 ~ 258, 266, 273~275, 278~284, 286, 287	
細川澄元	57, 90, 93, 94, 107, 108, 114, 201, 202, 216, 229 ~ 233, 266, 273, 276, 281, 287	
細川駿河守		71
細川高国	4, 6, 20, 21, 23, 24, 45, 47, 55~65, 69 ~ 74, 83, 85, 87, 89 ~ 95, 107 ~ 114, 118~122, 127, 130, 134~136, 150, 151, 183, 194, 196, 200 ~ 221, 225 ~ 236, 239 ~ 253, 255~268, 272~281, 284~287	
細川高基		276
細川尹賢	24, 62, 69~74, 76, 83, 85, 91, 95, 119, 209, 211, 243, 246 ~ 248, 250, 251, 253, 264, 277	
細川植国	72, 73, 250, 272, 277, 281, 286	

細川典厩家	70, 73, 97, 211
細川晴国	63
細川晴元	45, 63~65, 74, 75, 83, 109, 113~116, 121, 126, 144, 148, 149, 151, 179 ~ 181, 186, 194, 196, 198, 214, 215, 274, 275, 279~282, 284~287
細川尚経	96, 97
細川尚春	54, 96, 97
細川備中守護家	9, 25~27
細川政賢	96, 97
細川政誠	89
細川政元	7, 9, 21, 23, 26, 45, 48, 51, 52, 53, 54, 55, 64, 65, 79, 83, 96, 97, 98, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 114, 117, 118, 121, 122, 124, 126, 130, 139, 140, 142, 146, 151, 179, 194, 201, 213 ~ 216, 220, 223, 224, 225, 265, 273, 274, 275, 277, 279, 280, 281, 284, 286, 287
細川満元	235
細川宮寿	72
細川持賢	73
細川持隆	232
細川元有	138, 141
細川基経	24
細川野州家	107, 108, 275
細川頼之	91, 98, 110, 130

ま

政長流畠山家	114, 131
松田	22
松田長秀	137~139
松田晴秀	240, 241, 243, 248~250, 262
松田英致	97, 199, 200
松田孫左衛門尉	248
松田頼隆	241, 250
松永久秀	123
万里小路秀房	148
満濟	99

み

水本坊	97, 98
溝杭亀松丸	180
三好氏	5, 7, 11, 22, 115, 212, 214, 268

多賀高忠 4
 武田家 127
 武田元信 45, 51, 53, 64, 84, 103, 127
 武田元光 45, 47, 60~62, 119, 241, 254, 260,
 266, 277, 278, 286
 伊達植宗 227, 254, 259, 266, 278
 種村三郎 226
 つ
 土御門有春 100, 247, 251
 て
 寺町通定 140
 寺町通能 239, 240, 242~245, 252, 256, 257,
 262, 272
 と
 土岐 102
 土岐家 53
 土岐成頼 222
 土岐政房 53, 55
 土岐頼純 241, 254, 266
 徳川将軍家 33
 徳大寺実淳 137, 227
 な
 内藤 7
 内藤国貞 148, 149, 204, 217
 内藤貞正 204
 内藤氏 23
 中沢 201
 中沢氏 215
 中沢秀綱 201, 204, 214~217, 239, 240, 242
 ~245, 251, 252, 256, 257, 262
 長塩 7, 247, 263, 264
 長塩氏 23
 長塩民部丞 248, 253
 長塩元親 139
 長橋局 148
 中御門宣秀 109
 難波常弘 224

に

二条尹房 109
 蜷川家 30
 蜷川式部丞 70
 蜷川親孝 209
 蜷川親俊 200
 庭田重親 109

は

畠山 27, 32, 102, 200
 畠山家 59, 277
 畠山惣領家 28, 58, 103, 124
 畠山植長 23, 45, 55~59, 64, 92, 108, 127, 248,
 249, 255, 256, 259, 261, 267, 268, 272,
 276, 286
 畠山能登守護家 28, 58
 畠山順光 68, 83, 84, 91, 230, 233
 畠山尚順(卜山) 7, 57, 79, 83~85, 88~90,
 103, 120, 124, 127, 219, 220, 224, 226,
 271, 274, 284
 畠山政国 114
 畠山政長 8, 89, 90, 103, 224, 255
 畠山持国 99, 101
 畠山基家 90, 102, 103, 223~225
 畠山基延 91
 畠山義就 101
 畠山義英 45, 51, 57, 98, 103, 108, 124, 224
 畠山義総 91, 248, 255
 畠山義元 7, 45, 55~59, 64, 83, 84, 91~93,
 118, 120, 219, 220, 226, 229, 255, 274,
 284
 波多野元清 281
 葉室光忠 103, 223
 ひ
 東坊城和長 96, 109, 110
 日野内光 51, 72
 日野富子 125
 広橋兼秀 148
 広橋守光 109, 227

樹下	115, 116
樹下成保	100, 114, 121
京極	32, 102
京極高清	53, 55
清原宣賢	230
<	
九条家	205, 206, 217
け	
嚴助	225
こ	
古阿弥	91
光濟	98
香西三郎次郎	240, 241, 245, 246, 257
香西元長	146
香西元盛	281
興清	111
河野氏	23
久我	194, 196
久我家	146, 150, 197, 198, 204, 205
後柏原天皇	48, 52, 92, 105, 106, 227, 228, 286
久我晴通	109
五条家	197
後土御門天皇	31, 48, 122
後奈良天皇	148
近衛種家	75
近衛尚通	87, 89, 91, 95, 127, 202, 225
近衛政家	104, 105
今春	91
今春大夫	68, 91
さ	
齋藤	201
齋藤貞船	183, 201~206, 208, 209, 213, 214, 217, 218
齋藤宗甫	203
齋藤基雄	199, 200
齋藤元右	139, 140
齋藤元陸	207~209, 211, 216, 218
佐子局	235, 241~243, 246, 247, 250, 256, 257, 263, 264

佐々木	102
貞敦親王	149
寒河千代市丸	186
沢路重清	144
三条西公条	148
三条西家	202, 216
三条西実隆	46, 49, 202, 203, 227
し	
持円	99
実松院義忠	52
斯波	32, 102, 200
斯波惣領家	103
斯波持種	101
斯波義健	101
斯波義寛	103
斯波義統	108
聖護院道増	100
勝光寺光贇	128, 272
庄氏	27
新開隆実	227, 270, 272
尋尊	106, 224
進藤貞治	115, 116
す	
菅原為康	109
杉原孝盛	246, 247, 251
せ	
清貞昭	202, 216
清元定	96
摂津政親	97
摂津元造	247, 251
禪春	137~139
禪椿	141, 142, 212
禪予	138, 140~143, 212
そ	
増運	99
た	
第十帯刀左衛門尉	148
高倉永康	54

石井顕親 186, 205~207, 209, 217
 石井梅千代 207, 209, 218
 石井家 205, 217
 石井直安 205
 石井豊安 205
 石井長親 186, 205~208, 217
 石井春親 205, 206
 石井秀安 205
 石川 241
 和泉上守護 141
 和泉下守護 141
 伊勢家 5, 30, 66, 67, 70, 78, 86, 127, 192, 193,
 200, 240, 251
 伊勢貞孝 200
 伊勢貞忠 69, 70~73, 83, 84, 108, 126, 233~
 236, 239, 240~242, 244~246, 248, 250,
 251, 253, 255~259, 261, 263, 271, 272,
 278, 280
 伊勢貞遠 240, 243, 245~247, 249, 250, 252,
 261, 262
 伊勢貞就 91
 伊勢貞久 240~242
 伊勢貞陸 69, 83, 84, 145, 146, 226, 271, 274
 伊勢貞宗 83, 84, 103, 104, 126
 伊勢宗端 269
 伊勢惣領家 84
 一条冬良 105
 一宮季明 140
 一色尹泰 91
 茨木長隆 148, 149, 179~181, 183, 186, 214

う

上杉定実 254, 260, 266, 278
 上野政益 139
 上野元治 139
 上原 7, 143
 上原賢家 140, 142
 上原元秀 23, 139, 140, 142, 269
 浦上村宗 60, 62, 83~85, 93~95, 107, 108,
 120, 128, 277

お

大内 21

大内家 58, 283
 大内義興 6, 7, 13, 20, 23, 45, 55~60, 64, 83,
 84, 89~93, 107, 118, 120, 122, 125, 127,
 145, 146, 213, 219, 220, 225~229, 232,
 249, 265, 266, 268, 273~276, 279, 284
 大館家 234
 大館常興 22, 30, 66, 70~72, 130, 221, 234~
 236, 239, 240~248, 250~254, 256~259,
 261, 263, 264, 266, 272, 278, 280, 285
 大館高信 245, 247, 257
 大館晴光 271, 254
 大館政信 91
 太田保定 203, 247, 263
 大友義鑑 85, 272
 小笠原 247, 263
 荻野左衛門大夫 230
 織田氏 6
 織田信長 3, 5, 29, 145, 213, 275
 越智家栄 224
 越智家頼 50, 61, 62, 119, 277, 286

か

香川 247, 263, 264
 香川孫房 140
 香川満景 140
 香川元綱 204
 香川六郎左衛門尉 140
 覚雄 98
 賢兼 216
 勘解由小路在富 100, 240, 242, 244, 245, 247,
 249, 251, 259, 260
 神余昌綱 272
 金山孝実 250
 賀茂在貞 99
 賀茂在通 97, 98
 観世 253
 観世大夫 95
 観世元忠 73
 観世元広 48
 甘露寺元長 225

き

義賢 99

索引

【人名】

あ

赤沢長経 90
 赤沢政真 209
 赤松家 32, 84, 93~95, 102, 107, 277
 赤松政則 103
 赤松政村(才松丸・晴政) 85, 93~95, 241, 254, 259, 266, 278
 赤松義村 60, 93~95, 107, 230, 231
 秋庭 7, 247, 263, 264
 秋庭氏 23, 27
 秋庭元重 140
 朝倉家 241, 272
 朝倉貞景 48, 49, 53, 55
 朝倉孝景 240, 241, 254, 260, 261, 266, 272, 278, 286
 足利將軍家 12, 16~18, 23, 30, 33, 34, 98, 100, 101, 103, 108, 117, 120, 121, 123, 137, 193, 256, 278, 285
 足利政知 102, 103
 足利義澄 5, 15, 17, 18, 20, 21, 32, 34, 46, 48, 51~55, 57, 60, 62, 64, 65, 83, 88, 90, 96~100, 102~108, 112, 115, 117, 118, 121, 122, 124~127, 129, 193, 225, 229, 286
 足利義植(義材) 5~8, 15, 17, 20~23, 32, 33, 50, 52, 53, 55~57, 59, 60, 62, 64, 65, 68, 69, 83, 84, 87~91, 93, 102, 103, 105, 107, 108, 118~120, 122, 125, 130, 190, 193, 215, 219, 220, 222~234, 250, 255, 266, 268~274, 276, 277, 279, 284, 286
 足利義維 286
 足利義輝 18, 21~23, 33, 34, 74~77, 79, 85, 96, 98, 100, 112~116, 121, 129, 211
 足利義教 33, 34, 97~100, 129, 286
 足利義晴 5, 6, 14, 15, 17, 18, 20~22, 30, 32

~34, 59, 60, 62~64, 66, 69~77, 79, 83, 85, 93~96, 98~100, 107~113, 115, 116, 119~122, 127, 129, 130, 132, 143, 144, 148, 193, 217, 221, 222, 233~236, 239~248, 250~253, 255~268, 271, 276~282, 286, 287

足利義晴室 75
 足利義尚 5, 21, 22, 66, 103, 137, 143, 220, 222, 223, 269
 足利義政 27, 96~103, 110, 126, 255
 足利義視 53, 222
 足利義満 32, 33, 35, 91, 98, 100, 110, 130
 足利義持 32, 129
 飛鳥井雅俊 54, 69
 安倍有富 99
 安倍重宗 203, 216
 安倍孫一 202, 203, 215, 216
 安倍宗時 98
 有岡賢定 216
 淡路二郎 91

い

飯尾 201
 飯尾家兼 151, 179, 213~215
 飯尾公則 202, 215, 216
 飯尾清房 137, 138, 139
 飯尾貞広 241, 250
 飯尾貞運 111, 112, 135, 240~243, 245, 247~249, 251, 258, 261, 262
 飯尾氏 27
 飯尾堯連 242, 248, 249
 飯尾為完 135
 飯尾為隆 241
 飯尾秀兼 135, 150, 201~204, 207, 212, 214~217
 飯尾元兼 194, 196, 201~205, 216, 217
 飯尾元運 196, 198, 202, 215
 飯尾元行 97

◎著者略歴◎

浜口 誠至（はまぐち・せいじ）

1982年 三重県に生まれる

2012年 筑波大学大学院博士課程 人文社会科学研究所修了
博士（文学）

現 在 東京都立産業技術高等専門学校 非常勤講師
東京大学史料編纂所 技術補佐員

〔主要業績〕

『四国と戦国世界』（共著、岩田書院、2013年）

ざいきょうだいまいようほそかわけいちよう けい せいじ し てきけんきゅう
在京大名細川京兆家の政治史的研究

2014(平成26)年3月31日発行

定価：本体6,500円(税別)

著 者 浜口 誠 至

発行者 田 中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話075-751-1781(代表)

印 刷 亜細亜印刷株式会社
製 本

©S. Hamaguchi

ISBN978-4-7842-1732-8 C3021